

方法論かエートスか？：政治理論におけるリアリズムとは何か

山岡, 龍一
放送大学教養学部：教授

<https://doi.org/10.15017/2230964>

出版情報：政治研究. 66, pp.1-31, 2019-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

方法論かエートスか？

——政治理論におけるリアリズムとは何か——

山岡龍一

はじめに

- 一、用語の確認——「政治理論における」リアリズム
 - 二、基本テーゼ——ゴイスとウィリアムズから
 - 三、リアリズム理解の深化
 - 四、リアリズムの展開
- おわりに

はじめに

近年、英語圏、とりわけイギリスの規範的政治理論の領域において、リアリズム (realism) の復権と呼べる現象がある。しかし、現実主義とも訳されるこの「リアリズム」という言葉は、政治学において古典的な用語である。いったいなぜ「復権」なのか、そしてその意味は何であるか、という問いが当然浮上する。しかも、このリアリズムという用語で、何が意味されているのかも、必ずしも自明ではない。本稿は、この問いを追究することで、「政治理論とは何か」というより一般的な問いを批判的に検討することを目指す。この現象を有意義に理解できる解釈を探ることで、政治理論という営みの反省を促し、「優れた政治理論とは何なのか」というより特殊な問いに関して、根本的な問いが提起できることを示すつもりである。

一．用語の確認——「政治理論における」リアリズム

まず、用語を明確化しておこう。問題となっている現象を表わすために必要な区別として、D・ランシマンはIRリアリズム (International Relation Realism) とPTリアリズム (Political Theory Realism) という用語を提示している。およそ政治学に携わる者なら、自らを「非現実的だ」と称するわけではないはずだ、という想定の下、我々が対象とする人々は、二つの思想との対比でそのアイデンティティを得るとランシマンは主張する。つまり、一方における道徳主義 (moralism) と、他方における国際関係リアリズムもしくはリアルポリテイク (Realpolitik) である。その上で、それぞれを象徴的に表す人物の名前を使いながら彼は、ここでの主題がPTリアリズムであり、それは「ロールズとキッシンジャーのあいだのどこか」にあるのだと指摘する (Runciman 2017: 3)。

これは、極めて有益な議論の始め方である。だが、さらなる洗練化が必要だろう。まずIRリアリズムそのものが多義的であり、それをリアルポリテイクと同一視するのは単純に過ぎる。例えば、この伝統の古典とされるE・H・カー

や日・モーゲンソーの議論にしても、近年の研究は単なる権力政治の追求に還元できないとしている(西村二〇一三宮下二〇一三; Scheuerman 2009)。IRリアリズムという伝統を、道徳と政治(権力)の観点から考察すれば、そこには様々な両義性が見出される¹⁾。少なくとも、国際関係論におけるリベラリズム/リアリズム論争から生じた、ネオリアリズム(neorealism)(しばしば、構造的リアリズム(structural realism)と呼ばれる)という潮流がある²⁾。したがってここでは、この新潮流をNIRリアリズムとし、カーやモーゲンソーに代表される伝統を、古典的(Classical)IRという意味でCIRリアリズムと呼ぶ。

かかる区別が可能ならば、PTリアリズムも、CPTとNPTリアリズムに区別できそうである。しかしこの区別には若干の注意が必要であろう。本稿の考察対象はNPTリアリズムであるとして、このカテゴリーに属する議論の新しさ(固有性)を説明するのが、本稿の目的となる。しかし実際はこうした議論がしばしば、自らの立場を説明するために、リアリズムの古典を引き合いに出しているのである。つまり、CPTリアリズムとの連続性を強調する傾向があり、この点で、CIRとの非連続性を意識して生まれたNIRリアリズムの同定と、かなり事情が異なるといわざるをえない。CPTとNPTリアリズムの違いについては、本稿の論述によって明らかにしたい。

同時に注意すべきなのが、CIRリアリズムとNPTリアリズムとの関係性である。ランシマンが示すように、NPTリアリズムは一般にかなり意識的にNIRリアリズムと距離を置く(Geuss 2010: x)。しかし、既に述べたようにNPTリアリズムはその源泉としてCPTリアリズムを示すことが多いため、CIRリアリズムとの区別が曖昧になる。なぜなら、CIRリアリズムもまた、CPTリアリズムとの連続性を強調するからである。一般に次のリストが、リアリズムの古典として理解されている。すなわち、トウキデイス、アウグステイヌス、マキアヴェッリ、ホップズ、ヒューム、ニーチェ、ウェーバー、シュミット等であり、これにパブリアス(つまり『ザ・フェデラリスト』の著者達)を加えてもよい。³⁾このリストは、政治の理論のみならず実践でも、リアリズムを説明する際に頻繁に利用される、汎用性の高いものだといえる。NPTリアリズムの同定にとって問題となるのが、このリストにCIRリアリズムの古典、例えばカーやモーゲンソー等を付け加えられるか否かである。これに関しては、肯定派(Scheuerman 2013; Sleat 2017;

McQueen 2018) もいるが、多くの論者が否定というよりは無視・無関心という態度を示している。本稿としては、CPTとNPTRリアリズムの関係性を明確化することで、この問題の理解の仕方を示したい。

以上のような用語上の区別を前提にして、以下の論述においてリアリズムが論じられるとき、それはつねにNPTRリアリズムが対象となっていることを確認しておきたい。そして必要に応じ、NPPT、CPT、CIR、NIRといった区別が使用されるだろう。

二. 基本テーゼ——ゴイスとウィリアムズから

リアリズムはかなりの数の研究と論争を生み出しており、日本でもこの論点と論争はある程度紹介されてきた。⁽⁴⁾ここではまず、リアリズムが注目された端的な契機と、そこでの問題提起を明らかにしたい。リアリズムの名でなされる議論は、政治理論の伝統の中で継続的になされてきたといえる。これが独自の現象として広く認識されるきっかけとしては、リアリズムをテーマとした特集が、雑誌 *European Journal of Political Theory*, vol.9 (2010) において組まれたこと、そしてそこでリベラルな徳性論で有名なW・ギャルストンが、一種の宣言文に近い論文を発表したことに求められる。ギャルストンはリアリズムを、「理想理論」に対して批判し代替案を提示せんとする一群の思想家達による、現在勃興しつつある運動を指すものとして理解し、その中には、哲学者、政治理論家、政治科学者といった、多様なジャンルに属する者が含まれるとした。彼が列挙した人物名は、Bernard Williams, Stuart Hampshire, John Dunn, Glen Newey, Ricard Bellamy, Geoffrey Hawthorne, Raymond Geuss, John Gray, William Connolly, Bonnie Honig, Chantal Mouffe, Mark Philip, Quentin Skinner, Judith Shklar, Jeremy Waldron, Stephen Elkin である (Galston 2010: 386)。彼自身認めるように、このリストはある種「こった煮」であり、これだけで分析できることはあまりない。それにもかかわらずこのリストを提示したのは、そこにはある種の感情やテーマの共有があるという彼の直感、(現在何かが起こっている)という彼自身の時代把握感覚によるのであり、それゆえにこの論文は、「宣言文」のように映る。我々に必要なのは、このリ

ストも依拠した、さらなる分析である。

ギャルストンの説明において特に分析が必要な用語が、「理想理論 (ideal theory)」である (この用語の方法論争上での特異な意味については後に検討する)。ここではこの雑誌に寄稿された多くの論文に共通する論点の関係から、この用語の意味を明らかにしたい。ランシマンが指摘したように、リアリズムの主たる特徴として道徳主義批判という要素がある。理想理論で言われていることはこの要素に対応し、その具体的な対象は、ロールズに代表される現代の分析的政治理論の主流派である (Galston 2009)。現代の (規範的) 政治理論に、ロールズ産業と呼べる潮流があることは、二〇世紀後期におけるロールズ政治理論の衝撃と影響を考えるなら、特段の説明の必要もないであろう。⁽⁵⁾ 他方、批判する側にもキーパーソンがいる。この雑誌の論者のみならず、リアリズム論者の多くがその名前をあげるのが、R・ゴイスとB・ウィリアムズである。⁽⁶⁾

リアリストが注目するゴイスとウィリアムズの議論には、リベリズム批判という理論の実質に関するものと、政治理論の方法論に関するものがある。ロールズが、この両方の点で圧倒的に影響力があるため、この二つはしばしば分離されずに論じられる。ここでは以下に、理想理論批判としてのリアリズムの、基本的な考え方を明確化することに努めたい。最も基底的な考え方は、「政治理論は応用倫理学ではない」というフレーズに表される。ゴイスによれば、

わたしが退けようとしている考えによれば、最初に倫理学の仕事を仕上げることで、我々がいかに行為すべきか、という問題を扱う理想理論が獲得され、その上で第二段階として、この理想理論が政治の行為者の行為に適用することができる、ということになっている。……理想理論としての「純粋」倫理学が最初に、その次に、応用倫理学が成立するのであり、政治学は応用倫理学の一種である、ということになっている (Geuss 2008: 8)。

他方、ウィリアムズも、現代の政治理論における二大潮流である、功利主義とロールズ主義の両者に共通する性質があることを、以下のように論じている。

両者とともに、政治的なものに対する道徳的なものの優位を表象している。「功利主義」の下では、政治は（かなり大雑把にいつて）道徳的なものの道具となっている。「ロールズ主義」の下では、政治が正当に（rightfully）行ないうることに関する制約を（『正義論』においては、大変厳しい制約を）、道徳が課すことになっている。双方において、政治理論は応用道徳のようなものとなっている（Williams 2005: 2）。

かかる批判に伴い提示される標語が、「倫理第一主義から政治第一主義へ」というものである。ウィリアムズは、秩序の確保、つまり安全（security）の問題こそが、第一の政治的問題（the first political question）だとする。なぜなら、これは時代や場所を超えて普遍的に要求される問題であり、道徳的問題を含めたあらゆる問題の解決は、この第一の問題の解決を必要とするからである（Williams 2005: 3）。同様にゴイスも、自らの立場を「倫理第一主義（ethics-first）」の否定としながら、適切な政治理論の在り方を、四点に分けて説明している。つまり、①政治理論は、現実の制度の作用と、その下で行為する人々の実際の行為に注意を払うという意味で、リアリストでなければならぬ。②政治が第一義的に関わるものは、信念や命題ではなく、行為とその文脈であることを、政治理論は認めねばならない。③政治というものが、歴史の中に位置づけられたものであるという事実を、政治の研究は必ず反映しなければならぬ。④政治は、理論の応用といった営みというよりは、技能（craft）や技巧（art）の行使のようなものであることを、政治理論は忘れてはいけない。こうした四つの命題からゴイスが主張するのが、現実の人間を動かすものへの注視の必要性であり、権力やイデオロギーといったものが歴史の中で実際に作用する様の研究の重要性である⁷⁷。

かかる立場を表明する際にウィリアムズとゴイスが言及するのがホッブズである。ホッブズこそ、道徳的対立の道徳内在的解決の不可能性を直視し、秩序の問題に縮刷した意味での政治の第一主義を唱えた政治理論家だとされる。自然権（自然法）思想家でもあるホッブズを、政治第一主義者とする解釈には、いささかの躊躇を覚えるが、S・ウォーレンが「彼は、政治的なものの感じ方で、我々が失ってしまったものが何であるかを教えてくれる」（Wolin 1960: 288 ≡ 三三五）としているように、自然状態と国家との対比と、その緊張関係を描くホッブズの政治理論に、この性質を帰する

ことは不自然ではない。だが、思想的にいつて更に問題となるのが、倫理第一主義批判という営みの固有性である。NPTリアリズムの標的がロールズのような道徳主義だとして、かかる批判対象が新しいものかというところ、そうではないからである。プラトンを引き合いに出すまでもなく、政治に対する倫理の優位性の主張は伝統的なものであり、政治理論の伝統では多数派であるときさえ言える。例えばジェントルマンの息子への教育指針を書いた書簡の中でロックは「わたしは真の政治学は道徳哲学の一部だと思えます」と述べていた。⁸そしてカントは「道徳とは、無条件に従うべき命令を示した諸法則の総体である」と記した直後に「実践の法学である政治と、理論的な法学である道徳のあいだに争いはない」(Kant 1914: 456 = 二一四)と主張していた。

NPTリアリズムに新しさがあるとすれば、倫理第一主義批判という特徴に、どのような固有性が求められるだろうか。政治思想的に転換点を求めるなら、それは二〇世紀のロールズではなく、一八世紀のカントになるであろう。先に引用したロックの書簡を検討するならば、そこで道徳哲学の著作の例だったのは、キケロの『義務について』とプーフェンドルフの『人間と市民の義務について』および『自然法と万民法について』であった。そして何よりも重要なことは、そこでロックはこうした道徳哲学の前に、リウイウスをはじめとする歴史書を、実践の導きとして学ぶべきことを教授している点である。そして、この書簡とほぼ同じ内容をもつロックの他の教育論では、ロックは政治学を二つの部門に分け、一つは「社会の起源と、政治権力の起源と限界に関するもの」とし、もう一つを「社会の中にいる人間統治の技巧に関するもの」していた。前者に関してはプーフェンドルフの二著に加えて、フーカールの『教会統治論』とアシドニーの『統治論』(そして自らの『統治二論』)を、後者については自国、つまりイングランドの歴史書を推薦している。⁹ここに見られるのは、理論・応用関係にあるというよりは、道徳哲学と政治哲学が、歴史研究を媒介として融合されているような理解であり、ジェントルマンの息子という未来の政治的行為者が学ぶべき実践的教養が、かかる融合として提示されている様である。こうした実践学的志向は、幾何学を範にする政治の科学を目指したホップズ以上に、リアリズムなものだといえる。このことに鑑みると、大きな転換点はむしろカントであり、カント主義哲学のロールズに対する影響を考えるなら、NPTリアリズムの批判の焦点は、単なる道徳主義もしくは倫理第一主義というよりは、

カント主義に影響を受けた分析的政治理論の潮流だという仮説が浮上してくる。

こうした道徳主義批判と一体となったリアリズムのテーゼとして、ギャルストンをはじめとした人々が指摘するのが、政治の自律性 (autonomy) である (Galston 2010: 390-394; Sleat 2016: 32)。つまり、理論・応用モデルに依拠する道徳主義が、政治を道徳に還元してしまうのに対し、かかる還元可能性を否定する立場が、リアリストの中に見いだせる。しかしこれもまた古典的なりアリストや、既存のリベラリズム批判の中にも見出せる見解である。例えばモーゲンソーは「経済……、倫理、美学、宗教とは別の、行為と理解の自律した領域」として政治を理解することを政治的リアリズムの根本的な特徴とするという、明らかにシュミットを思わせる主張をしている⁽¹¹⁾。あるいは、非政治的なりベラルヘ向けられたB・クリックの批判は、政治の自律性とともにもその擁護の主張であったことを、想い出せばよい (Crick 1992: 123f.)。この点に関してNPTRリアリズムの特徴は、ロールズ批判、というよりは『正義論』の成功の結果生じた政治理論の支配的な研究傾向への批判、に求められる。ロールズが正義を「第一の徳 (the first virtue)」と主張して以来、善に対する正の優位という仕方⁽¹²⁾で、現代リベラリズムの道徳・政治理論において義務論的傾向が主流となった⁽¹³⁾。これはリアリズム批判においては、政治に対する道徳の優位という問題として表象される。

ここで、「政治の自律性」テーゼについて若干の分析をしておきたい。なぜならこのテーゼは、このままではきわめて曖昧な意味しか持たないからである。マックイーン (McQueen 2018: 246-247) の問題提起を参考にして、以下のような三解釈が可能だといえる。第一が、字義通りの自律性、つまり存在論的独立性を主張しているという解釈である。これは政治の他の領域への非還元性を最も強度のある仕方⁽¹⁴⁾で主張することを意味する。第二が、政治は独自の性質や論理をもつ活動として、他の人間活動と区別して認識することができるし、そのようにした方がよい、という主張を伴う解釈である。これは認識や解釈の上での領域的別離可能性を土台に、ある一定の仕方の認識や解釈を正当化しようとする営みだと理解できる。第三が、政治の領域と道徳の領域が相互に深く絡まり合っていることを指摘することで、政治を道徳へと還元することの不合理を主張しているという解釈である。この立場はこうした消極的なテーゼに加えて、政治は他のあらゆる領域とも絡まり合っているという、政治に独自の性質があることを指摘し、その意味で政治が特別の身分(つ

まり、「棟梁学」⁽¹⁴⁾ともいえる身分)をもつことを主張する。⁽¹⁵⁾

リアリズムの理論家達は必ずしもこの三つの理解の区別を意識していないが、第一の解釈が支持しがたいことは明らかである。もしもこの解釈をとるなら、政治は「政治的なもの」によってのみ正当に理解できるといふ、トートロジーに陥ってしまう。さらには、「権力」のような(たいていは恣意的な仕方で)特殊政治的だとされる価値にあらゆる政治を還元するという、あまり生産的でない別の還元論に陥ってしまう危険性がある。したがって、第二と第三の解釈の方が有望であるが、おそらく、NPTリアリストがコミットするのは第三のものだと思われる。なぜなら、先のロールズ主義批判の文脈から出てきた、影響力のあるテーゼが、「正義から正統性へ」というものだからである。ロールズ以降、正義の研究が活況を呈したことは言うまでもない。このこと自体、研究者共同体にある種のトレンドがあることが不可避なのだから、それほど問題のないことかもしれない。しかしリアリストの多くは、こうした偏向が政治の理解(とりわけ、政治を研究する者の政治の理解)そのものに与える影響を危惧しているのである。そしてこれに対抗して提示されるのが、特殊政治的な倫理的価値(Sigwart 2013)であり、第三の意味での政治の自律性と調和する価値である、正統性(legitimacy)の概念なのである(Runciman 2012: 66)。

実際、ゴイスもウィリアムズも、正統性に格段の注意をはらっている。問題となるのは単なる正統性ではなく、政治的正統性、とりわけウェーバーの国家の定義にあるような、一定領域内で暴力の独占を正当化できる根拠としての政治的正統性である。リアリスト達の正統性論に顕著な特徴として、歴史性の強調がある。ゴイスは、集合的行為(とりわけ暴力)の理由づけである正統性の形態が、不可避免的に人間の行為によって影響を受けるものであるがゆえに、時代や社会によってさまざまに異なることを強調する。政治的行為者にとって具体的な時点で、具体的な事柄に関する特定の政策について、正統性を付与できるか否かは、最も重要な問題であるとしながらゴイスは、そうした能力は特定の文脈に配慮しなければ得られないのであり、しかも、その正統性の内容に関して、それが混乱していたり矛盾をはらんでいたりしていることを、政治的行為者は受け入れなければならないと主張する(Geuss 2008: 34-36)⁽¹⁶⁾。そして政治的正統性に関して、それは理由づけではあるが、伶俐に基づく道具的な正当化や、道徳的公理に訴える倫理的な正当化にも還元

できない理由づけであることに、ゴイスは注意を促している (Geuss 2001b: 35-37)。

同様にウィリアムズも、政治的正統性の可変性と歴史性を強調するが、ある種の普遍性も強調している。既にみたように彼は、第一の政治的問題として、すべての協調可能性の条件である秩序や安全、そして(相互)信頼の確保をあげ、それを普遍的課題とした。この課題を歴史上実際に担ってきたのが国家であり、この役割を果たすうえで国家が援用してきたのが、暴力に基づく恐怖と、統治の正統性だったのである。恐怖だけではこの仕事を果たすことはできない。なぜならその場合、解決策そのものが問題となってしまうからである。したがって国家には、政治的役割を果たすために特殊な正統性が必要となる。彼はそれをBLD、つまり「基本的な正統性要求 (Basic Legitimacy Demand)」と呼んでいる (Williams 2005: 4)。

BLDがBLDであるために必要な要素としてウィリアムズが主張するのが、受容可能性 (acceptability) である。国家は、政治的問題に何らかの解決をもたらすが、その解決策が人々にとつて受容可能なものでなければならぬ。その上で彼が強調するのが、何らかのBLDが受容可能である理由は、その内容によるのではなく、被治者の承認によるという点である。つまり、リベラルであるとか正義に適用といった、何らかの道徳原理の充足によって正当化がなされるのではない。人々が実際に承認するという事実が、決定的に重要なのである。かかる承認の有無が、政治的服従と隷従、つまり市民と奴隷の違いを生む。つまりBLDこそが、政治と非政治を分かち規準となる。第一の政治的問題を具体的に解決するためには、何らかの権力行使が必要であり、それは抑圧する者と抑圧される者を生み出すであろう。BLD的に問われるべきは、この時抑圧された者にとつて、この解決策が問題ではなく、解決だと承認されなければならない、ということである。そうでないなら、これは解決ではなく、問題の継続ないしは増加であり、換言すれば、政治ではなく支配 (domination) であることになる。したがって、「力 (might) は正 (right) を含意しない。権力はそれ自体で正当化することはない」というのが、基本公理だとされる (Williams 2005: 5)。

かくしてBLDの内容、つまりその実質的な妥当性は、具体的な文脈によつてのみ決定される。では、その妥当性をどのようにして測ることができるのか。(普遍的な)道徳原理に訴えることができな以上、それは経験的で歴史的な

方法によるしかない。しかし、政治的な規範であるBLDを統治の事実から、何らかの規準なしに引き出すとすれば、それは単なる相対主義にならざるをえない（これは、政治の自律性に関する第一の解釈、つまり「存在論的独立性」の解釈にまつわる問題性と同じ恣意性をもつ）。そこでウィリアムズは、道徳原理による基準ではなく、解釈原理による規準を提示する。つまり、「何らかの正当化が受容されたとしても、その受容そのものが、正当化されるとされる当該の強制権力によってつくられている場合、その受容は妥当性をもたない」という「批判理論原理 (the critical theory principle)」である。この原理には一般的な定式化がなされている。

ある社会において二つの集団があり、ある集団が他の集団に対して優位性を、特に権力という点において、有していると仮定しよう。そして、このような優位性の分配を正統なものとするとされる何らかの物語があり、その物語は、少なくとも優位である集団によって公言されており、劣位にある集団によっても一般的に受け入れられている、と仮定しよう。そして、この劣位にある集団がこの物語を、したがってこのシステムを受け入れているという事実を生じさせた原因が、優位である集団がもつ権力だと仮定しよう。その場合、劣位にある集団がこのシステムを受け入れているという事実は、このシステムを正統なものとはしないのであり、そしてそのように正当化できない程度において、この分配は不正なのである (Williams 2002: 221)。

これは一般化された原理であるが、ハーバーマスの討議倫理のように超越論的なものではない。ウィリアムズが問題にするのは、理由ではなく原因であり、具体的にどのような事実があり、どのような因果関係があつたのかという問いが、この解釈原理において必須の要素なのである。つまり、あらかじめ定められた道徳原理（例えば正義）が規準となるのではなく、具体的な、つまり歴史的な状況の解釈に従って「不正である」という道徳的判断が下される。したがってBLDの妥当性は、歴史的にのみ判断できるのであり、もしも現代の西洋社会において、リベラリズム以外に適切なBLDが見出せないとしたら、それは普遍的妥当性があるからではなく、近代社会という歴史的・偶然的条件によるか

ら、つまりその文脈の中にあるので、リベラリズムが一番納得のいく物語になるからにはかならないと、ウィリアムズは主張している (Williams 2005: 7-11)。

三. リアリズム理解の深化

以上のような仕方では基本テーゼを整理できるリアリズムであるが、ギャルストンが認知した「こった煮」にはさまざまな要素があり、多様な方向へと発展する可能性をもっている。ここでは、ギャルストンの宣言文以降さまざまに為されたリアリズムに対する反省を、論争の焦点だと一般に解されている方法論的関心という観点から検討してみよう。

W・ゴドウィンやT・ペインの研究者であり、政治理論と政治思想史の関係性も論じるM・フィリップは、さきに紹介した *European Journal of Political Theory*, vol.9 に論文を寄稿した一人である。そこで彼が論じたのは、規範的な政治家論もしくは政治的行為論であった。政治的行為者が依拠すべき規範、つまり政治的判断力の根拠は、不可避免的に文脈依存的な仕方では求められるべきなのだ (それゆえ現代の主流派政治理論は役に立たない) が、それにもかかわらず、かかる根拠が相対主義的ではない理由で擁護可能なものになることを示す理論として、リアリズムを提示することができるというのが、フィリップの論点であった⁽¹⁷⁾。彼はその後「幻想無きリアリズム」という論文を発表し、リアリズムのメタ理論と呼べるものを提示している (Philip 2012)。CIRとNPTリアリズムとの連続性を指摘しながら、ゴイスとウィリアムズの議論を検討するフィリップは、五つのテーゼを析出していると解釈できる。(1) 政治理論は、理想(合理性)ではなく、事実(実際の諸制度や人間の実際の心理等)から議論を始めなければならない。(2) 政治理論は行為 (action) に焦点を絞らなければならない。(3) 政治は歴史的に位置づけられたものとして理解されねばならないし、政治の研究はこの事実を反映しなければならない。(4) 政治的行為は、理論の応用という過程としてではなく、ある種の技能 (craft) や技巧 (art) のようなものとして理解されるべきである。(5) 政治的行為や判断の質は、時間の中で示されたある特定の役割を負った行為者の恒常的な判断によって、つまり、行為者の徳性 (virtue) によって示されることが多い。

当然のことながら、このテーゼはすでに同定された基本テーゼと重なるところが多い。本稿がここで注目するのは、以上のテーゼが、我々を不可避的に歴史研究や政治思想的な営みへと誘うということである。ギャルストンのごった煮に、ダンやスキナーの名前があったことから示唆されるように、リアリズムの勃興には、規範的政治理論研究における政治思想史の復権という要素を見出すことができる。フィリップ自身の見解は、こうした歴史を重視する政治（理論）研究は、ロールズのような規範理論に対する代替案（フィリップによれば、これがゴイスの主張である）ではなく、補充物となるべきだというものである。たしかに、リアリストが政治研究に対して要求するテーゼは、「政治の本性」に関わるがゆえに、不可避の要素をもつとされる。しかし彼によれば、これは「リアリズムか、あるいはロールズか」という二者選択を迫るものでもないのである（Philip 2012: 645-646）。

リアリズム運動全体に対する、ロールズ派からの整理としてA・バデーリンの議論がある（Baderin 2014）。彼女は、リアリズムのテーゼを基本的に、既存の政治理論に対する批判の試みとしてとらえ、二つの類型に分ける。つまり、「離れ置き批判（detachment critique）」と「置き換え批判（displacement critique）」である。これは、理論と実践（政治）という二つの項の関係をめぐる二種類の批判の在り方であり、前者は両者を分離してしまうことに対する批判であり、後者は理論が実践を不適切なものに置き換えたことに対する批判だとされる。バデーリンによれば、これは二つの異なった伝統であると同時に、一人の思想家の中に並存することもありうるような批判の様式である。

離れ置き批判は、理論と政治の乖離を問題にし、その連結の必要と方法を、特に実践性の文脈に置いて論じる。これは基本的に、方法論的な論争に読み替えることができる。バデーリンは考えている。他方、置き換え批判は、理論と政治との接近の仕方を問題にし、特に、前者が後者に与える悪影響を問題にする。したがってここでは、政治の理解もしくは解釈が論点となる。それは、政治に関する真正の意味の追求という形態も取りうるし、解釈そのものの政治化という形態も取りうる。ここから推察できるように、置き換え批判にはいわゆる大陸哲学アプローチと呼ばれる政治理論との重なりがある。バデーリンがこの類型の下に考えている批判は、B・ホーニッグを典型として（Honning 1993）、大陸哲学の影響を受けた分析的政治理論であると整理することもできる。この批判は、例えば、民主的な政治の理解をめぐる

議論において、有意義な貢献をするのだとされている。つまり、このタイプのリアリズムは、闘技的な政治の洞察を民主政治に導入することで、主流派の規範的政治理論が誤った仕方では表象する政治の問題性を糾弾する。ただし、置き換え批判一般の政治理論的妥当性に関して、バデーリンは懐疑的である。

バデーリンに限らず、一般にロールズ派（広義には、リアリストよりもロールズ的政治理論により強く共感するタイプの人々）は、方法論論争としてリアリストの批判を受け取る傾向にある¹⁸。実際、理論と政治の距離関係というのは、政治理論の実践性をめぐる論争として、それ独自の（主として学問的な）問題圏を形成している。この論争は二つのタイプに分けられる。つまり、実行可能性（feasibility）をめぐるものと、理想理論（ideal theory）をめぐるものである。前者は理論の現実化、とりわけ政策への転用可能性を問題にし、理論の役目は政治の実践に何らかの指針を提供できることにあるという立場から、純粹な、つまり観想的な理論的試みを、政治理論的には不適切なものとするものがある。近年では、J・ウルフのように、政治理論の政策的含意を集中的に問う研究者もでてきた（Wolff 2011）。しかし政治理論という学問分野において最も激しい論争を提起してきたのが、実行可能性への配慮そのものを、政治理論の発展にとつて障害物だとみなすG・A・コーエンの理論と、それへの反発である。

マルクス主義の立場を支持しながらも、分析哲学の方法と主題を真剣に取ったコーエンは、その晩年の著作において、原理と事実の関係をめぐる方法論的な論争を提起していた（Cohen 2003; Cohen 2008）。実践性に関するロールズ政治理論の立場である、「現実的なユートピア（realistic utopia）」という考えは、正義や平等の構想に、現実に基づく歪みを与えるものだと考えたコーエンは、規範的原理が究極的には、事実から完全に独立した仕方では定立可能である、という主張を行った。これは部分的には論理的な、つまり純粹に方法論的なテーゼであったが、部分的には現実を裁くユートピア的構想の構築を政治理論の役目とする、極めて実践志向的な要求でもあった。この主張は、政治理論上の立場を超えて、しかしとりわけ分析的な政治理論に従事する人々のあいだで、おびただしい反発と、それに対する擁護を惹起した¹⁹。論争の詳細に入ることは紙幅の限界もあり、ここでは控えたいが、この論争にリアリストと目される人々も参加している事実は、リアリスト論争と原理-事実関係論争のあいだにつながりがあることを示している。

同様に理想理論をめぐる論争も、リアリストの批判をロールズ派の人々が分析的政治理論上の方法的問題として受容する場であると理解することができる。方法論における「理想理論」という用語とそれに付随する理論は、ロールズが『正義論』において導入したものである (Rawls 1999a: 78 = 二二～二三)²⁰。それには、正義のような理想を探究する、そしてかかる探究に必要な理想状況を設定する、という二つの意味での「理想」の意味が込められている。それは、正義に合う、秩序だった社会 (a just, well-ordered society) を効果的に描くために必要な理論的な道具であり、それが単なるユートピアではなく、現実的なユートピアであるために、非理想理論とセットになって構想されている。非理想理論とは、現実を描く理論ではなく、理想理論によって描かれた正義が、政治的に実現可能になるために、その障害になるものを理念的に、理想理論を出発点として段階的に描くものである (したがってリアリストの見れば、両者とも現実からの抽象にすぎないし、予め定められた道徳理念によって制御されている)。したがって両者は、厳格な遵守理論 (strict compliance theory) と、部分的な (partial) 遵守理論とも表現される。理想理論の導出に関して、ロールズは「好ましい状況下」という要素も付加している (Rawls 1999a: 215-216 = 三三〇～三三一)。つまり、秩序だった社会の実現に対する自然や歴史的偶然性による制約を、調整可能な問題として非理想理論の領域に置くことで、正義の実現のために必要な目標として、好ましい状況下における理想状態が描かれるのである²¹。

理想・非理想理論という用語は、「秩序だった社会」や「現実的なユートピア」だけでなく、「正義の状況」「原初状態」「無知のヴェール」といったロールズ政治理論における鍵概念と密接に関係しているだけでなく、彼の国際政治論である『万民の法』においても、理論の基軸となる役割を果たしている (Rawls 1999b)。それゆえに、グローバル正義論も含んだ広範な領域においてこの用語は論争を惹起している²²。上記の定式から明白なように、これは原理・事実関係にも、また理論・実践関係にも関わるし、倫理第一主義が方法論的に明示化されたケースだとみなすことができるがゆえに、リアリズムのテーゼと深く対立するものである。

方法論としてこの論争を真正面からとらえ、リアリズムの立場を徹底的に批判したのが E・エルマンと N・ミュラーである (Erman and Möller 2015)。彼女らが方法論論争の標的としたのは、(リアリズムがその一部であるとされる)「実

実践・依存テーゼ (Practice-Dependent Thesis) PDT」であり、その提唱者の一人である A・サンジョバンニによればその中心テーゼは「正義の構想の内容、範囲、正当化は、その構想によって統治することが意図されている実践の構造と形態に依存する」(Sant'iovanni 2008: 138) というものである。この方法論は「実践・独立テーゼ (Practice-Independent Thesis) PIT」と対比され、後者に属するとされるのが、コーエンをはじめとする運の平等主義や、リバタリアニズム、そして古典的功利主義のいくつである (ibid: 139)。本稿において興味深いのが、PDT が「文化的規約主義者 (cultural conventionalist)」と「制度主義者 (institutionalist)」の二種類に分けられ、ルールズが後者の「パラダイムのな事例」となれていることである (ibid: 138, 150)。これはグローバル正義論におけるルールズ主義者が、PDT の制度主義者と、PIT のコスモポリタンに分けられていることを意味する。そしてサンジョバンニは、PDT の中にウィリアムズやゴイスのリアリズムを含めている。

サンジョバンニが PDT と PIT の違いを提示する際に、最も重要視するのは正当化の次元である。PIT も実践的であるためには、当然ながら社会実践に関する (経験的) 事実を考慮にいれる。しかし PIT は (コーエンに典型的なように) 規範原理の正当化が、実践の外部に依拠しなければならないとする。これに対し PDT は、実効的で、責任のある政治理論は、PIT の立場を取るべきでないと主張するのである。エルマンとミュラーの PDT 批判は多岐にわたるが、根本的な批判はこの正当化問題に向けられている。主として二種類の批判が重要である。第一に PDT は、実践に関する解釈行為であるとされる。つまり実践というテクストをめぐる、その規範的な意味を抽出する営みが、方法論として提示されている。しかし、規範原理を同定し、正当化するという行為を、解釈という方法を通じて行うとき、PDT であっても何らかの実践の外部にある、もしくは普遍的に定立された、規範的な原理を必要とするはずである。第二に、PDT は規範原理の適用と正当化を厳密に分離し、PIT の問題性は、前者においては実践への依存を認めているが、後者においては認めていない点にあると主張している。しかしエルマンとミュラーによれば、PIT とされている方法論でも、ルールズという反照的均衡の方法を採用するならば、PDT の批判はほとんど重要性を失うことになる。我々に反照的均衡という方法論の詳細を検討する余裕はない。ここでは、その一つの特徴が、原理や理論とそれが

適用される現実とのあいだで、意味同定の往復作用が繰り返されることを要求するというものであることを確認したい。つまり、たとえリアリストが道徳主義として批判する理論が、道徳原理の同定から始めるとしても、それはやがてこのような往復作用によって調整されることで、暫定的により適切なものへと近づいていくはずだとされるのである。

エルマンとミユラーの第一の批判に応えるためには、解釈の理論に従事する必要がある。そして、第二の批判に応えるためにも、それは同様である。なぜなら、ロールズの反照的均衡の考え方を、解釈学との関連から論じることができ⁽²⁵⁾るからである。ここでも、この主題について詳細に検討する余裕はない。ここでは、NPTの固有性という、本稿の主題に関する限りで、この批判の意味を考える。第一に、我々はこのことにロールズ主義のたくましさとも呼べるものを見いだす。リアリストからの批判をロールズ主義者が真剣に捉える場合でも、それをロールズの理論装置の中に吸収してしまうのである。⁽²⁶⁾そしていわゆるリアリストの立場にあるとされる者の中に、ゴイスのロールズ批判は誤解だとして、ロールズをリアリスト批判から免責する者もいるのである (Jubb and Rossi 2015: 456)。ここから、リアリストの中での立場の違いの同定とか、方法論としての洗練 (反照的均衡に吸収可能なか否か) といった、リアリスト理解のさらなる深化の必要性が浮かび上がってくる。しかし、もう一つの指針として浮かび上がってくるのが、方法論問題はリアリストの主張の中核ではない (Rossi and Sleat 2014: 696)、どうリアリスト理解の可能性である。

四. リアリズムの展開

もしも方法論としての展開がリアリズムにとって魅力的でないものだとしたら、どのような展開が政治理論的にいつて望ましいのだろうか。実質的な内容ではない、ということとは、本稿の最初に見たようにその論者の議論や立場の多様性を考えると、明らかである。多様な議論の中に、何らかのコミットメントが共通してうかがえることはたしかである。ここでは、リアリズムをエートス⁽²⁷⁾として捉えるのが有効である、という仮説を提起したい。リアリズムの動向を振り返えると、二種類のエートスが有望に思える。それは、否定的批判のエートスと、建設的批判のエートスである。

否定的批判のエートスは、リアリズムの主役の一人、ゴイスに象徴される。ここでは、ゴイスの路線を引き継ぎつつ、リアリズムの内部からNPTRリアリズムを批判するフィンレイソンの議論 (Finlayson 2017) を検討したい。リアリズムの特徴としてしては、反ユートピア主義と歴史主義があり、両者は人間本性の暗い側面、つまり行動予測や対立解消の困難性への注目を惹起する。こうした傾向はしばしば、道徳主義の普遍性の反転として人間性に関する必然的な悲観主義 (pessimism) に陥る。この必然性の感覚は、ある種の運命論となり、現実における「変えられるもの」の存在を忘却させてしまう。これは、政治的可能性の認識を縮減させる効果をもち、これに秩序、安定性、暫定協定といったリアリズムの概念が加わると、現状維持の肯定という保守主義へと帰結する可能性がある。

フィンレイソンによれば以上が、保守的リアリズムが生まれる展開なのだが、これは現状を変えられないという悲観主義が、現状が結局は最善であるという楽観主義に反転するという倒錯した保守主義であるだけでなく、リアリズムの主張を改革の望みをシニカルに批判する仮面とする点で、あけすけな反動よりも性質が悪いことになる。彼女の憤怒は「ほとんどのリベラルは、まさしくリベラルとして、リベラルな資本主義の枠内にいる政治的行為者の規制と策略の側に落ち着くことになり、本格的な社会改革の立場をとらないに決まっているのだ」(ibid: 270) という表現に現れている(彼女が批判対象に考えているのはギャルストンである)。ただし、悲観主義に欠点があるといっても、人間性の明るい側面、例えば協調や約束の力のみに注目すればよいわけではない。たとえその楽観主義が現実在即したものである、このようなリアリズムは道徳主義の陥穽、とりわけ権力の隠蔽に容易に墮してしまう(ここで批判されるのはJ・タリーである)(ibid: 272-273)。むしろ悪しき悲観主義に対抗する希望は、偶然性への注目によってもたらされるとフィンレイソンは主張する。彼女が支持するのは、〈世界は変えられるし、変えなければならぬ(この世界は首肯し難い)〉という意識と結びついた悲観主義であり、その例としてあげるのがアドルノである²⁸⁾。つまり、変革への意志が、現実的可能性の認識と結びつくタイプの政治的リアリズムがありうるものであり、ラディカルリズムへの可能性を掴む展望を、これまで多くのリアリストが否定してきたことをフィンレイソンは糾弾している。こうして、CPTとNPTRリアリズムに共通の傾向である、悲観主義的な人間本性論への警戒が示された。つまり、人間本性だとされているものが、いかに歴史的、

社会的な構築物であるかを冷静に見極める必要があるものであり、彼女の場合この必要性は方法論としては系譜学に、そして政治理論としてはフェミニズムに結びついている。

リアリズム内部からなされる同様の批判は、ランシマンにもある。「現実的であれ」という要求は、しばしば政治の限界性の強調に至り、政治の理解を阻害することがあるという (Rancinan 2012: 68) 彼は、道徳主義が権力の行使や自己欺瞞を隠蔽する煙幕として機能するというリアリズムの批判の妥当性を認めながらも、リアリズム自身も、固定した現実という考えによって同様に煙幕となりうることを指摘する。

リアリズムは道徳主義の主張に対して、権力、偶然性、そして正統性の観念を対抗させる。しかし、こうしたカテゴリー自身が狭量なものとなり、それゆえに、それ自身の用語で「非現実的な」ものになることがありうる。権力の重要性を執拗に強調することは、硬直したレアルポリテイクに変容しかねない。偶然性が不可避であることを強調することは、宿命論の一形態になりかねない。正統性に専心することは、いかなる犠牲を払っても秩序を称揚することになりかねない (Rancinan 2017: 10)。

こうした危険性を回避するのに有効な方法論が、フィンレイソンと同様に、系譜学であることをランシマンは主張する (Ibid: 12)。それは、悲観主義的にも楽観主義的にも捉えられる偶然性として、現実を理解する態度だといえよう。

こうした系譜学的リアリズムが、現代政治理論において果たすべき建設的批判について、ランシマンは次のように述べている。NPTリアリズムにおいてウイリアムズのBLDの議論こそが、これからも継承すべきものなのだとしながら、彼はその「批判理論原理」の重要性を強調する。それは、権力／正統性批判を遂行するうえでいまだに有効であり、特に、従来の政治理論が主題化してきた権力形態である国家権力に代わって、現在ますますその重要性が認められているネットワーク権力(情報処理社会の中で意図せざるかたちで生じてきた、水平的に蠢く権力関係)を理解するうえで有効だとされる (Ibid: 13-21)。ネットワーク権力に関しては、まだ政治学の観点からも技術論の観点からも、十分な

析がなされているとはいえないとしながらランシマンは、それに対してなされる樂觀論（新たな自由の可能性への希望）や、悲観論（管理・監視社会の到来という宿命論）から自由に、その権力の在り方を冷静に理解し、そのうえで伝統的に主題化されたテーマ（例えば、残酷さの回避の追求や、政治的代表的有効性の検討）を探究することが、リアリズムには可能なのだと主張している。

このように建設的批判のエートスを代表する理論家として理解されるのが、リアリズムのもう一人の主役、ウィリアムズなのである。実際、リアリズム論争においてウィリアムズを扱った研究は圧倒的に多く、特にウィリアムズを基に、新たなリベラリズム（それは、何らかの非基礎付け主義的リベラリズムになる）を探る研究が次々と生まれている。³⁰ここでは、この展開を追う余裕はないので、建設的批判を最もよく表していると思われる、M・スリートによるイギリス現代政治へのリアリズム適用の推奨事例を「ごく簡単に検討しておきたい。二〇一五年に発表されたエッセイ「政治の優先——もつと現実的なりベラリズムに向かつて」(Sleat 2015)においてスリートは、グローバル化や情報社会の進展と格差社会の深刻化が進む中で、アイデンティティ・ポリティクスやナショナリズムが跋扈するイギリスにおいて、リベラリズムが深刻な危機にあることを率直に認める。つまり、テロ対策やデータ保持政策の名の下に、プライバシー、言論の自由、法の支配といったリベラルな価値が危険にさらされており、同時に、急進的なポピュリズムや、新しい権力の形態が勃興しているとされた。

こうした危機に対してスリートは、あえてリベラリズムの知的・実践的遺産の再検討を提唱する。「リベラリズムとは、価値と利益の対立によって特徴づけられる社会における、秩序と妥協の政治である」(ibid:309)と述べる彼は、〈社会を対立の場と見て、秩序の形成と維持を、集合的幸福の追求に対して優先させる〉(暴力や残酷さを避け、妥協を重んじる)という、明らかにリアリズム的な立場から議論をしている。換言すれば、彼は非道徳主義的政治観こそが時代に必要なのだと言張るのである。政治的不一致の時代に、道徳主義的な政治は情緒的にいつて魅力的に映るが、取り返しのつかない分断を生みかねないという点で、極めて危険である。政治的關係とは、敵にも自らと同等の尊厳を認めつつ、差異の中で争い、結果を出して行くことであり、そこには必ず敗者が生まれるが、それは永続的な敗者とはならない。そ

して政治的なりベラリズムが非道徳的だというわけでもない。スリートによればそこには道徳的な核心があるのであり、あらゆる種類の権力から個人を擁護するという態度がそれである (ibid. 308)。それは、元々は宗教権力と結びついた国家権力からの擁護であったが、やがて経済的権力からの擁護も、その内実に含まれるようになった。ただし、経済権力が働く場である市場に対して、リベリズムは両義的な立場をとってきた。彼によれば「リベラルな政治は、その最善の形態において、交換によって対立を飼い馴らし、個人が介入を受けることなく自分自身の利益を追求することを可能にするという、市場が果たす役割を評価しているが、それと同時に、経済的権力それ自身が、リベラルな秩序の理想にとつての脅威となるかもしれないという、絶えず存在する可能性のことも承認しているのである」 (ibid. 309)。絶え間ない「権力」への警戒こそが、現実主義的なりベラリズムの特徴であり、政治とは妥協の追求ではあるが、完全なバランスは望めない。スリートによれば、社会的権力は永遠に変化するものであり、我々に求められるものは、つねに当座の均衡に過ぎないのである。このような洞察が、ウィリアムズの最善の解釈とは限らないし、スリート自身の政治理論もさらなる展開がある。しかしながら、建設的批判のエートスがいかなるものであるかを理解するには、これが充分な事例だといえるだろう。

おわりに

NPTリアリズムは、現実への志向性を持ちつつもつねに現状を批判する視座を求めるといって、批判的エートスとして理解することができるし、それが望ましい。こう考えるなら、CPTとNPTリアリズムの関係は、同種のエートスの共有によってその連続性が説明され、まさしくエートスであるがゆえに、それが求められる文脈の違いによって、その差異が説明される (ただし、本稿においては、カントとロールズという、二つの分岐点の設定が可能であることが明らかになった)。もちろんこの解釈は、NPTリアリズムが持つ方法的な意義を否定するものではない。とはいえ、より優れた政治理論の探究という観点からみたととき、注目すべきはそのエートスであるというのが本稿の結論である。た

だし、この主張には次のような批判が出されるであろう。エートスとしての質というのは、政治理論の評価規準になりうるのか、という疑問である。これはとりわけ、学問産業としての政治理論が発達するにつれ、中立的な評価規準が（特に査読作業の場において）求められてくる中で方法論の洗練化が進むという、現代の潮流を考えるなら当然の疑問である。「エートス」のような概念が、政治理論の質の規準になりうるのだろうか。いわゆる科学的方法論にかぶれた人々には、到底納得できない規準にしかならないだろう。しかし、他ならぬNPTリアリズムの勃興の理由のすべてとはいわないまでも、その一部が、このようなエートスが政治理論に不可欠であるという共通理解にあるとはいえないだろうか。

最後に二点ほど、政治理論におけるリアリズム研究の課題を述べておきたい。すでにみてきたように、エルマンとミューラーは、主として方法論の観点から、リアリズムを批判してきた急先鋒である。彼女らの批判の一つで、リアリストからも真剣に取られているものは、道徳主義を批判しながらリアリストは、道徳的価値を密輸入しているのではないか、というものである。例えばウィリアムズの批判理論原理は、支配と（正統な）政治の違いという概念的区別に基づいているが、この区別は単に概念的なものではなく、道徳的のものではないか。このような批判に対して、リアリストの側からは、特殊政治的な規範原理というものがあり、それは道徳原理一般とは政治的に区別できるし、されるべきだという応答がでてくる。この特殊政治的な規範の有無という問題は、今後も論争を惹起するであろう（Maynard and Worsnip 2018）。

最後に、リアリストとされることはほとんどないが、PDT理論家に含まれるD・ミラーによる、現代政治理論の評価を考察したい（Miller 2013, ch.10）。G・A・コーエン等の運の平等主義者を批判する論考の中でミラーは、こうしたPIT理論が勃興してきた文脈として、ポスト冷戦期におけるネオリベラリズムの蔓延を設定する。この時期、左派の平等主義的政治哲学は、現実的政策へ影響を与える可能性があります縮小していくなかで、現実政治に汚染されない純粹理念としての規範原理を追求していくことになったとするミラーは、このような態度を「哀歌としての政治哲学（political philosophy as lamentation）」と呼ぶ。興味深いのは、こうした（ミラーの意見では無責任な）政治哲学の潮流を、新アウグスティヌス主義と彼が呼んでいることである。確かに、西ローマ帝国の滅亡を目の当たりにして、神の国

の洞察を追求するアウグステイヌスに、「哀歌」という特徴を見ることは可能である。しかし、稀代のリアリストに数えられるアウグステイヌスを、PIT理論家と同一視するというのは首肯しがたい解釈である。少なくとも、彼とドナティストとの論争 (Augustine 2001: 128f.) を知る者にとって、ありえない解釈であるように思える。

ここはアウグステイヌス解釈を競うところではない。問題としたのは、なぜミラーがそのような解釈をしたのかということである。ミラーとアウグステイヌスのあいだにある決定的な違いが、このような解釈を生んだ、というのがわたしの仮説である。そしてその差異とは、超越性の視座を認めるか否か、ということに求められる。ミラーをはじめおよそほとんどの現代の規範理論家は実質的価値の追求に関して、超越的視点を認めず、内在的な視座に留まる。つまり、実践の内部にとどまり、外部への跳躍を控える。倫理的考察において超越論的視点が設定されることがあっても、それはあくまでも周到な哲学的手続きによってなされるのであり、直接的な超越性への訴えは退けられる。とりわけNPTRリアリストは、その現実主義ゆえに、かかる超越性への訴えには警戒するのが通常である。しかしながら、リアリストのエートスが、まさしく現実的であるために、超越的な視座が働くということが可能なのであり、アウグステイヌスこそが、そのような事例だといえないだろうか。つまり、超越性の視座がリアリズムに貢献するという可能性を、追究する余地があるように思える。この観点において思い出されるのが、二〇世紀を代表するCIRリアリストのラインホルド・ニーバーである。というのも以下に引用する彼の祈りが、フィンレイソンとランシマン、スリートの洞察を、簡潔な仕方で見事に表しているように思えるからである。

神よ、変えることのできない事柄については冷静に受け入れる恵みを、変えられるべき事柄については変える勇氣を、そして、それら二つを見分ける知恵を、われらに与えたまえ。³¹

この引用によって本稿が最後に確認したいのは、NPTRリアリズムにおけるこうした超越性の隠蔽の告発ではない。現実の中から規範を生み出すことの困難性を、改めて確認し、それを人間の境涯において追究する際に、超越性の視座は

極めて示唆的であり啓蒙的である、ということだけである。

* 本稿は二〇一八年六月一六日に開催された九州大学政治研究会でなされた報告に基づいている。このような機会を与えてくれた岡崎晴輝さん、そして当日研究会と懇親会に参加し、有益な質問とコメントをしてくれた方々に感謝を表明したい。

注

- (1) 例えば、Elman and Jensen 2014; Bell 2009; Bell 2010; Wright 1991 等を参照。
- (2) 例えば、Walz 1979; Walz 2008; Mearshimer 2001 等を参照。
- (3) このリストはMcQueen 2018: 243 に依拠した。これは、この論文を読む前に準備した九州大学政治研究会でわたしがなした報告の中のリストと、ほぼ一致するものである。
- (4) 山岡二〇一三；田村二〇一四；乙部二〇一五に加えて、山岡二〇一七も参照。
- (5) 例えば、井上・田村二〇一四に所収の諸論考を読めばこのことは明らかであろう。ロールズの現代性に関しては、井上二〇一八が明らかにしている。
- (6) 対象とされる主たるテキストは、Geuss 2008 と Williams 2005 である。
- (7) Geuss 2008: 9-18 and *passim* を参照。ゴイスの倫理学第一主義批判としての政治理論に関しては田村二〇一二：五〇―五二に優れた要約がある。ゴイスは、人々の行為に実際に影響を与えるものに注視するがゆえに、通俗的なリアリストのように権力にのみ関心を向けたりしないし、科学主義を誇るリアリストのように真理のみを探究しない。彼は幻想 (Illusion) のような人間の想像力に影響を与えるものに我々の注意を向けさせる。例えば、Geuss 2001b や Geuss 2010 を参照。
- (8) Locke to Cary Mordaunt, Countess of Peterborough. [Oates?] [September/October 1697?], in Locke 2002: 253.
- (9) Locke 2002: 252; Locke 1989: 321-322 を参照。
- (10) 近代政治思想史においてカントを転換点とする見方は、Tuck 1993: xv にあり、本稿も基本的にこの解釈に同意している。
- (11) Morgenstau 1961: 5 = (上)：四三。モーゲンソーとシュミットの興味深い関係性については、宮下二〇一二：三四、五七―六一 等や、Scheuerman 2009: *passim*, esp. 32-39 を参照。
- (12) これは、ゴイスによれば、単なる想定であり、直観に依拠するものであるのにもかかわらず、そして、具体的な文脈を一切排除し

た条件で定式化されたがゆえに、いかなる現実的な理由づけも与えられないにもかかわらず、定言的な主張であるという、致命的な欠点をもつ主張である。Geuss 2008: 70-76。

(13) この義務論テーゼこそ、サンデルをはじめとする共同体主義者によるロールズのリベラリズムへの批判における要点であった。例えば、Muhall and Swift 1996 を参照。ただし、近年のロールズ研究（例えば、田中二〇一七）は、単純な義務論でロールズを特徴づけることに關して批判的である。

(14) ただし、アリストテレスが言う意味での、すべての領域を指導できる、という強い意味での棟梁学ではなく、すべての領域の守護者であり、平和の為の管理者であるという、弱い意味での棟梁学である。

(15) この第三の解釈を明晰に述べているのが Finlayson 2017: 267 である。

(16) このような非合理性が例外ではなく、むしろ不可避であるとゴイスは考えるので、世界像の論理を追求するハーバーマスのコミュニケーションの倫理に対して、極めて懐疑的な態度をとる。

(17) Philip 2010 を参照。Jubb の議論は Philip 2007 に依拠したものである。この著作によって彼はアリストの一人と目されている。

(18) Baderin 2013: 141 を参照。その他 Jubb 2015; Thomas 2017; 松元 2015 等を参照。

(19) 例えば、Leopold and Stears 2008 に所収の諸論考や、Jubb 2009; Hall 2013; Forcimes and Talisse 2013 を参照。

(20) ロールズの理想理論に關する簡潔な要を得た説明は、Nickel 2015 と Stempowska and Swift 2014 である。

(21) ロールズは後の著作で「適度に好ましい状況とは、政治的な意志が存在すれば立憲政体 (a constitutional regime) が可能になる、そのような状況である」と述べている (Rawls 2001: 101 = 一七九)。

(22) 例えば、Valentini 2009; Valentini 2012; Rätikka 1998; Simmons 2010 等を参照。リアリスト論争の基軸に照らして見ると、理想理論を激しく批判するのが Mills 2005; Farrelly 2007 であり、それに対して一定の擁護をするのが Jubb 2012 である。

(23) 方法論としてこれは正義に限らず、社会实践の統制に關わるあらゆる規範原理に適用可能であるとサンジヨバンニ達を考えている。

(24) 文化的規約主義者にあげられているのは、M・ウォルツァーとD・ミラーである。

(25) ロールズと解釈学については、Warnke 1992 を参照。反照的均衡については松元二〇一八を参照。ただし松元は、解釈学ではなく、ポスト実証主義の影響を指摘している。この両者は分析的哲学の伝統からは、その類似性が強調されている。

(26) そもそも、PDT を方法論として提唱する者が、まさしくロールズ的方法論が分析的政治理論の方法論の標準であるがゆえに、ロールズ的な理論的装置を使用して議論を構築するので、このようなことは容易になる。例えば、Ronzoni 2009 を参照。

- (27) 「エートス」は一般的には倫理的態度を指す言葉であるが、その源泉の一つであるアリストテレスの倫理的徳は、優れたものを生み出す人格の善き性格＝傾向性を意味する。この語は「エートス」は、優れたものを生み出す、たいていは教養の所産である、理論家の性格を意味するものとして使用される。
- (28) フィンレイソンが依拠するのは Freyenhagen 2013: 1 のアデルノ解釈である (Finlayson 2017: 290 n.29)。
- (29) リアリズムの展望を系譜学に求める議論は『二部』二〇一五にもある。
- (30) Baxster-Gould 2011; Hall 2015; Hall 2017; Rossi 2012; Rossi 2013; Sagar 2018; Sigwart 2013; Sleat 2007; Sleat 2010 等を参照。ウィリアムズとリベラリズムに関については Sagar 2014; Forrester 2012; Sleat 2013 等を参照。
- (31) これは「平静の祈り (The Serenity Prayer)」と呼ばれる一九四三年になされたニーバーの祈り。翻訳は、ニーバー一九七五の冒頭にある引用。

参考文献

- Augustine (2001) *Political Writings*, ed. by E. M. Atkins and R. J. Dodaro, Cambridge: Cambridge University Press.
- Baderin, Alice (2014) "Two forms of realism in political theory", *European Journal of Political Theory*, vol.13 (2): 132-153.
- Baxster-Gould, Alex (2011) "Bernard Williams: Political Realism and the Limits of Legitimacy", *European Journal of Philosophy*, 24(4): 593-610.
- Bell, Duncan ed. (2009) *Political Thought and International Relations: Variations on a Realist Theme*, Oxford: Oxford University Press.
- Bell, Duncan (2010) "Political realism and the limits of ethics" = Duncan Bell ed. *Ethics and World Politics*, Oxford: Oxford University Press: 93-110.
- Cohen, G. A. (2003) "Facts and Principles", *Philosophy & Public Affairs*, 31, no.3: 211-245.
- Cohen, G. A. (2008) *Rescuing Justice and Equality*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Crick, Bernard (1992) *In Defence of Politics*, 4th edn, London: Weidenfeld and Nicolson (1st 1962).
- Elman, Colin and Michael A. Jensen eds. (2014) *Realism Reader*, New York, NY: Routledge.
- Erman, Eva and Niklas Möller (2015) "Practices and Principles: On the Methodological Turn in Political Theory", *Philosophy Compass*: 533-546.
- Farrelly, Colin (2007) "Justice in Ideal Theory: A Refutation", *Political Studies*, vol.55: 844-864.

- Finlayson, Lorna (2017) "With radicals like these, who needs conservatives? Doom, gloom, and realism in political theory", *European Journal of Political Theory*, vol.16 (3): 264-282.
- Forchimes, Andrew T. and Robert B. Talisse (2013) "Clarifying Cohen: A Response to Jubb and Hall", *Res Publica* 19: 371-379.
- Forrester, Katrina (2012) "Judith Shklar, Bernard Williams and political realism", *European Journal of Political Theory*, vol.11 (3): 247-272.
- Freyhagen, Fabian (2013) *Adorno's Practical Philosophy: Living Less Wrongly*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Galston, William A (2009) "Realism and Moralism in Political Philosophy: The Legacies of John Rawls" = Shaun P. Young ed. *Reflections on Rawls: An Assessment of his Legacy*, Surrey: Ashgate Publishing: 111-129.
- Galston, William A (2010) "Realism in political theory", *European Journal of Political Theory*, vol.9 (4): 385-411.
- Geuss, Raymond (2001a) *Public Goods, Private Goods*, Princeton, NJ: Princeton University Press (日語訳 | 題『公共の善と私善』記数書 号 1100風華)
- Geuss, Raymond (2001b) *History and Illusion in Politics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Geuss, Raymond (2008) *Philosophy and Real Politics*, Princeton NJ: Princeton University Press.
- Geuss, Raymond (2010) *Politics and the Imagination*, Princeton NJ: Princeton University Press.
- Hall, Edward (2013) "Political Realism and Fact-Sensitivity" *Res Publica*, 19: 173-181.
- Hall, Edward (2015) "Bernard Williams and the Basic Legitimation Demand: A Defence", *Political Studies* vol.63: 466-480.
- Hall, Edward (2017) "How to do realistic political theory (and why you might want to)", *European Journal of Political Theory*, vol.16 (3): 283-303.
- Honnig, Bonnie (1993) *Political Theory and the Displacement of Politics*, Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Jubb, Robert (2009) "Logical and Epistemic Foundationalism About Grounding: The Triviality of Facts and Principles", *Res Publica* 15: 337-353.
- Jubb, Robert (2012) "Tragedies of non-ideal theory", *European Journal of Political Theory*, vol.11 (3): 229-246.
- Jubb, Robert (2015) "Playing Kant at the Court of King Arthur", *Political Studies*, vol.63: 919-934.
- Jubb, Robert and Enzo Rossi (2015) "Political Norms and Moral Values", *Journal of Philosophical Research*, vol.40: 455-458.
- Kant, Immanuel (1914) *Zum ewigen Frieden: Ein philosophischer Entwurf* (1795) in *Immanuel Kants Werke*, Band VI, herausgegeben von A. Buchenau, F. Cassirer, B. Kellermann, Berlin: Bruno Cassirer (中山元訳「永遠平和のため——哲学的な草案」〔永遠平和のため

- めに 啓蒙とは何か 他3編』光文社文庫、二〇〇六年：一四七～一七三頁)
- Leopold, David and Marc Stears eds. (2008) *Political Theory: Method and Approaches*. Oxford: Oxford University Press (山岡龍一、松元雅和監訳『政治理論入門 方法とアプローチ』慶應義塾大学出版会、二〇一一年)
- Locke, John (1989) *Some Thoughts Concerning Education*, ed. by John W. and Jean S. Yolton. Oxford: Oxford University Press.
- Locke, John (2002) *Selected Correspondence*, ed. by Mark Goldie from the Clarendon Edition by E. S. de Beer. Oxford: Oxford University Press.
- Maynard, Jonathan Leader and Alex Worsnip (2018) "Is There a Distinctively Political Normativity?," *Ethics* 128: 756-787.
- McQueen, Alison (2018) "The Case for Kinship: Classical Realism and Political Realism" = Sleat (2018): 243-269.
- Mearsheimer, John J. (2001) *The Tragedy of Great Power Politics*. New York, NY: W. W. Norton & Company, Inc. (奥山真司訳『大國政治』悲劇』完全版』五月書房新社、二〇一七年)
- Miller, David (2013) *Justice for Earthlings: Essays in Political Philosophy*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mills, Charles W (2005) "Ideal Theory' as Ideology", *Hypatia*, vol.20, no.3: 165-184.
- Morgenthau, Hans J. (1961) *Politics Among Nations: The Struggle for Power and Peace*, 3rd edn., New York: Alfred A. Knopf (1st 1949) (原彬入訳『国際政治』(上)(中)(下)岩波文庫、二〇一三年)
- Muhall, Stephen and Adam Swift (1996) *Liberals and Communicarians*, 2nd edn. Oxford: Blackwell Publisher (1st 1992) (谷澤正嗣、飯島昇藏他訳『リベラル・コミュニケーション論争』勁草書房、二〇〇七年)
- Nickel, James W. (2015) "Ideal and nonideal theory" = Jon Mandle and David A. Reidy eds. *The Cambridge Rawls Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press: 361-364.
- Philp, Mark (2007) *Political Conduct*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- Philp, Mark (2010) "What is to be done? Political theory and political realism", *European Journal of Political Theory*, vol.9 (4): 466-484.
- Philp, Mark (2012) "Realism without Illusions", *Political Theory*: 629-649.
- Räikkü, Juha (1998) "The Feasibility Condition in Political Theory", *The Journal of Political Philosophy*, vol.6, no.1: 27-40.
- Rawls, John (1999a) *A Theory of Justice*, revised edn. Oxford: Oxford University Press (1st, 1971) (川本隆史、福岡聡、神島裕子訳『正義論』改訂版、紀伊國屋書店、二〇一〇年)
- Rawls, John (1999b) *The Law of Peoples*. Cambridge, Mass: Harvard University Press (中山竜一訳『万民の法』岩波書店、二〇〇六年)

- Rawls, John (2001) *Justice as Fairness: A Restatement*, ed by Erin Kelly, Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press (田中成明、亀本邦、平井亮輔訳『公正さよしの正義 再読』岩波書店 二〇〇四年)
- Ronzoni, Miriam (2009) "The Global Order: A Case of Background Injustice? A Practice-Dependent Account", *Philosophy & Public Affairs*, vol.37, no.3: 229-256.
- Rossi, Enzo (2010) "Modus Vivendi, Consensus, and (Realist) Liberal Legitimacy", *Public Reason* 2 (2): 21-39.
- Rossi, Enzo (2012) "Justice, legitimacy and (normative) authority for political realists", *Critical Review of International Social and Political Philosophy*, vol.15, no.2: 149-164.
- Rossi, Enzo and Matt Sleat (2014) "Realism in Normative Political Theory", *Philosophy Compass*: 689-701.
- Runciman, David (2012) "What is Realistic Political Philosophy?", *Metaphilosophy* vol.43: 58-70.
- Runciman, David (2017) "Political Theory and Real Politics in the Age of the Internet", *The Journal of Political Philosophy*, vol.25, no.1: 3-21.
- Sagar, Paul (2014) "From Scepticism to Liberalism? Bernard Williams, the Foundations of Liberalism and Political Realism", *Political Studies*: 1-17.
- Sagar, Paul (2018) "Legitimacy and Domination" = Sleat (2018): 114-139.
- Sangivanni, Andrea (2008) "Justice and the Priority of Politics to Morality", *The Journal of Political Philosophy*, vol. 16 (2): 137-164.
- Scheuerman, William E (2009) *Hans Morgenthau: Realism and Beyond*, Cambridge: Polity Press.
- Scheuerman, William E (2013) "The Realist Revival in Political Philosophy, or: Why New is not always Improved", *International Politics*, 50: 798-814.
- Sigwart, Hans-Jörg (2013) "The Logic of Legitimacy: Ethics in Political Realism", *The Review of Politics*, 75: 407-432.
- Simmons, A. John (2010) "Ideal and Nonideal Theory", *Philosophy & Public Affairs*, 38, no.1: 5-36.
- Sleat, Matt (2007) "Making Sense of our Political Lives – On the Political Thought of Bernard Williams", *Critical Review of International Social and Political Philosophy*, vol.10, no.3: 389-398.
- Sleat, Matt (2010) "Bernard Williams and the possibility of a realist political theory", *European Journal of Political Theory*, vol.9 (4): 485-503.
- Sleat, Matt (2013) *Liberal Realism: A Realist Theory of Liberal Politics*, Manchester: Manchester University Press.

- Sleat Matt (2015) "The primacy of politics: Towards a more realistic liberalism". *Juncture*, vol.21, 4: 305-310.
- Sleat Matt (2016) "Realism, Liberalism and Non-ideal Theory Or: Are there Two Ways to do Realistic Political Theory?". *Political Studies*, vol. 64(1): 27-41.
- Sleat Matt ed. (2018) *Politics Recovered: Realist Thought in Theory and Practice*. New York, NY: Columbia University Press.
- Stemplowska, Zofia and Adam Swift (2012) "Ideal and Nonideal Theory" = David Estlund ed. *The Oxford Handbook of Political Philosophy*. Oxford: Oxford University Press: 373-389.
- Stemplowska, Zofia and Adam Swift (2014) "Rawls on Ideal and Nonideal Theory" = Jon Mandle and David A. Reidy eds. *A Companion to Rawls*. West Sussex: John Wiley & Sons: 112-127.
- Thomas, Alan (2017) "Rawls and political realism: Realistic utopianism or judgement in bad faith?". *European Journal of Political Theory*, vol.16 (3): 304-324.
- Tuck, Richard (1993) *Philosophy and Government 1572-1651*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Valentini, Laura (2009) "On the Apparent Paradox of Ideal Theory". *The Journal of Political Philosophy*, vol.17, no.3: 323-355.
- Valentini, Laura (2012) "Ideal vs. Non-ideal Theory: A Conceptual Map". *Philosophy Capmas*: 654-664.
- Waltz, Kenneth N. (1979) *Theory of International Politics*. Reading, Mass.: Addison-Wesley (河野勝'岡垣知子訳『国際政治の理論』勁草書房'二〇一〇年)
- Waltz, Kenneth N. (2008) *Realism and International Politics*. New York: Routledge.
- Warnke, Georgia (1992) *Justice and Interpretation*. Cambridge: Polity Press (有賀誠訳『正義と解釈』昭和堂'二〇〇二年)
- Wight, Martin (1991) *International Theory: Three Traditions*. ed. by Gabriele Wight and Brian Porter. London: Leicester University Press (佐藤誠'安藤次男、龍澤邦彦、大中真'佐藤千鶴子訳『国際理論 三つの伝統』日本経済評論社'二〇〇七年)
- Williams, Bernard (2002) *Truth and Truthfulness*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Williams, Bernard (2005) *In the Beginning Was the Deed*. ed. by Geoffrey Hawthorn. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Wolff, Jonathan (2011) *Ethics and Public Policy: A Philosophical Inquiry*. London: Routledge (大澤津 原田健二朗訳『「正しい政策」がなぜなるのか』勁草書房'二〇一六年)
- Wolin, Sheldon S. (1960) *Politics and Vision: Continuity and Innovation in Western Political Thought*. Boston: Little, Brown and Company (尾形典男'福田敏一他訳『西欧政治思想史』福村出版'一九九四年)

- 井上彰編（二〇一八）『ロールズを読む』ナカニシヤ出版
- 井上彰、田村哲樹編（二〇一四）『政治理論とは何か』風行社
- 乙部延剛（二〇一五）『政治理論にとって現実とはなにか——政治的リアリズムをめぐって』『年報政治学』Ⅱ・二三六～二五六頁
- 田中将人（二〇一七）『ロールズの政治哲学 差異の神議論』正義論』風行社
- 田村哲樹（二〇一四）『政治／政治的なるものの政治理論』井上・田村（二〇一四）・四七～七二頁
- ニーバー、ラインホルド（一九七五）『義と憐れみ——祈りと説教』梶原寿訳、信教出版社
- 西村邦行（二〇一二）『国際政治学の誕生——E・H・カーと近代の隘路』昭和堂
- 松元雅和（二〇一五）『応用政治哲学——方法論の探究——』風行社
- 松元雅和（二〇一八）『ロールズと倫理学方法論』井上（二〇一八）・二七～四九頁
- 宮下豊（二〇一二）『ハンス・J・モーゲンソーの国際政治思想』大学教育出版
- 山岡龍一（二〇一三）『逸れグレイハウンドの誇り？——規範的政治理論と経験的政治理論の分業について』（『政治思想学会会報』第三
六号・一～六頁）
- 山岡龍一（二〇一七）『政治的リアリズムの挑戦——寛容論をめぐって』（『ニユクス』第四号・二三六～二四九頁）